

ニューズレター

第15号

2024年8月1日発行



TENNIS MUSEUM

<https://www.jta-tennis.or.jp/museum/>

(公財)日本テニス協会
テニスミュージアム委員会

〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-2
JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 7階
Tel.03-6812-9271

有明常設展示場にぜひご来場ください

テニスミュージアム委員長
吉井 栄



有明テニスの森公園インドアコート2階の『JTAテニスミュージアム常設展示場』



日本のテニスのメッカとしてすっかり定着した有明テニスの森公園には、東京2020オリンピック・パラリンピック開催に合わせて新設されたインドアコートの建物がある。真ん中の通路を挟み両側に4面ずつ並ぶハードコートは、2階通路からも観戦できる造りとなっており、アメリカNCAA所属大学のコートを思い出させる。

公園全体の管理棟でもあるインドアコートの正面ゲートを入ると、太陽の光が差し込む大きな窓を横に、2階の広間へと上がってほしい。そこに、テニスコートを模ったエリアが目飛び込んでくる。これこそ念願の『JTAテニスミュージアム常設展示』である。

当委員会の最終目標である博物館ができたわけではないが、52.5㎡ (7×7.5 m)のスペースに、凝縮された日本のテニスの歴史が描かれている。明治時代に始まったテニス伝来に始まる年表を見ると、モノクロ写真の中の人々が頬を色づかせているようでもあり、息を上げながらボールを追う声が聞こえてくるようでもある。当時は、あくまでも社交場での遊びであったのだろうと思いつつながら展示される写真を目で追うと、時の流れと共に独自の技術を身につけ、外国の情報を取り入れ、日本テニスの礎を築き世界へと挑戦し、日本そして世界を驚かせたレジェンドたちの姿が見えてくる。日本人初五輪メダリストの熊谷一彌氏、日本人で初めてウィンブルドン出場を果たした清水善造氏、全豪・全仏・全英ベスト4で世界3位の佐藤次郎氏――

友人の伊藤武氏を完成した展示場へと案内したとき、20分ほどの映像が流れるのを見入っていた彼が、「あれ、親父だ」と画面を指さした。関東と関西の対抗戦の様子らしい。父上のお姿にみんなで見入っていると、今度は「あれ、祖父だ」と言

い、よく見ると確かにそれは御子息の試合を観戦なさるおじい様のお姿だった。何気なく見た映像が、一気に身近なものに感じたことに驚いた。

後に沢松和子さんが日本女子初のウィンブルドン女子ダブルスで優勝し、2014年の錦織圭選手の全米準優勝へとつながることになる。ディスプレイされたラケットやトロフィーを見ながら、テニスというスポーツに全力で挑戦した男女、彼らの努力、度胸、挫折、歓喜を感じずにはいられない。

このような場所を実現するにあたり、寄附者の皆様はもちろん、ここまでご尽力された小田晶子前委員長と全ての委員の皆さんに感謝申し上げたい。そして何より、ミュージアムの実現を切望された全日本選手権で史上最多タイトルを獲得した宮城黎子さんは、今頃、天国で弟の宮城淳氏と喜んでくださっているだろうかと思わずにいられない。

テニスというスポーツが存在する限り、その記録は続き、選手たちはその才能と努力により新しい境地を開拓し続ける。一方で、テニスを楽しむ人々はテニスをとおして健康や友情を続ける。われわれのミュージアムも前に進む場所でありたい。昔の出来事やレジェンドたちに想いを馳せるだけでなく、未来へ向いていたい。そのような委員会の考えのもと、インドアコートの一階にある共有スペースにも、壁面を利用してミュージアムの展示を拡大する予定だ。2階展示スペースに合わせたデザインで、実施される大会と連動した企画展示などを考えている。

長い時を経て私たちの生活の中に根付いたテニスというスポーツが、今後どのように発展するかを見届けたい。その思いを共有するテニスファンの皆様に、引き続きのご支援とご協力をお願いいたします。

〈掲示板〉

(公財)日本テニス協会特定寄附金「テニスミュージアムに関わる寄附」へのご寄附のお願い
[ご寄附の方法]

①ネット決済の場合: JTAホームページ (<https://www.jta-tennis.or.jp/>) の「寄附」コーナーより、「寄附の方法」の「インターネットからのお申込みはこちら」ボタンをクリックしてお手続き下さい (<https://fundexapp.jp/jta-tennis/entry.php>)。

②振込の場合: 同封の振込用紙をご利用いただくか、日本テニス協会 (Tel.03-6812-9271) まで振込用紙をご請求下さい。同封・請求の振込用紙をご利用いただけますと、郵便局・ゆうちょ銀行、三菱UFJ銀行からは振込手数料が無料です。

〔頒布物のご案内〕

デ杯「甦る田園コロシオムの熱戦」DVD、フェド杯「日本女子テニス栄光への道のり〜フェデレーションカップの時代〜」DVD、「全日本テニス選手権90年の軌跡」DVDをご希望の方は、下記ミュージアム委員会までお問い合わせ下さい。テニス絵葉書 (3種類) はJTAホームページの「JTA STORE出版物頒布」もしくは「情報」コーナーの「出版物」よりお求めいただけます。

〔資料・情報提供のお願い〕

テニス史資料の情報、住所・姓名の変更などはJTAテニスミュージアム委員会までメールにてお知らせ下さい。(Eメールアドレス: museum@jta-tennis.or.jp)

*JTA テニスミュージアムの活動にご賛同いただいた方々の一覧は、JTA 公式ホームページの「寄附」の「芳名録」に記載させていただきます

鎌倉ローンテニス倶楽部100周年

テニスミュージアム委員
鎌倉ローンテニス倶楽部会員
越智 和夫



慶応義塾大学庭球部時代の野村祐一氏(左)と熊谷一彌氏



昭和30年代の初めころの御成コート
のベンチに座る
安部民雄氏(左)
と熊谷一彌氏

7面クレーの笛田コートとクラブハウス



敗戦の傷が癒えてきた1957(昭和32)年ころから、当時の皇太子殿下(現上皇陛下)が、葉山御用邸においてになられる度に、ご自身運転の自動車でお越しになり、鎌倉LTCにいらっしゃるようになりました。会員をお相手にプレーされ、気軽に談笑され、1958(昭和33)年の第27回鎌倉トーナメントには殿下が会場にいらした記録も残っています。

名選手や文士が集う華やかなクラブ

『鎌倉ローンテニス倶楽部(鎌倉LTC)』が、今年100周年を迎えました。

1923(大正12)年7月、第1回鎌倉トーナメント(通称“鎌トー”)が、鎌倉海浜ホテルコート、鶴沼東屋コートで開催。その翌年、平岡平右衛門邸内コートで野村祐一が中心になって結成された『湘南社交クラブ庭球部』が前身です。鎌倉LTCは日本人のみによって設立されたパブリッククラブとしては、恐らく日本で最も古いものと思われる。1927(昭和2)年に3面の「御成コート」が建設され、1931(昭和6)年に鎌倉ローンテニス倶楽部と改称されました。柏尾誠一郎、熊谷一彌、安部民雄、山岸成一、山岸二郎、西村秀雄などの名選手のほか、久米正雄、大佛次郎、小林秀雄、今日出海、田中純、太田四州、橋戸頑鐵など鎌倉文士のほか、海軍軍人や学生なども多く在籍する華やかなクラブだったようです。

第2次世界大戦を乗り越えて

都心から離れた鎌倉のテニスクラブでも、戦時下ではさまざまな苦難に見舞われています。

1932(昭和7)年からクラブの主催大会となった鎌倉テニストーナメントは、1939(昭和14)年から7年間中止になっていますが、この年からテニスボールにも配給制が採用されたことが要因の一つだったと聞いています。

さらに戦況が悪化すると、1943(昭和18)年には1面のコートは畑にされ、残ったコートの使用も警戒警報、空襲警報が発令されない日曜、祭日のみに限定されたといわれています。翌年には、さらに1面が畑となり、1945(昭和20)年4月には実質的な閉鎖を迎えました。

しかし、戦争が終結すると、芋畑にされず守り抜いた1面のコートをもとに有志が集まり復興に着手。会員から寄附を募るなどして3面のコートを修復し、海外から復員してきた人々が順次入会したといわれています。

鎌倉市笛田の地にクラブが移転

地主からの返還要求により御成コートを開け渡し、現在の笛田に新しいコート7面とクラブハウスが完成したのは1982(昭和57)年11月のこと。御成コート時代は3面のコートに対し会員数が400名ほどであったため、新規会員の募集は基本的に凍結状態。しかし、コート数が増えて多くの希望者を受け入れられるようになったことで、新クラブ開設時には会員が600名を越える規模になりました。当時、公営コートやスクールなど市民がテニスを楽しむ環境が整っておらず、人気が高まるテニスをプレーするにはクラブに所属するしかなく、入会希望者はとても多かったようです。



鎌倉LTCのクラブハウスには、熊谷一彌や山岸二郎のラケット、戦前の“鎌トー”が掲載された書籍や写真などの歴史を保存する部屋があります。保管されている昭和30年代初頭のクラブ会報に、「テニスのエチケットについて」という記事があります。

「倶楽部ライフはコミュニティの一種ですから、会員各自はその重要な一核単位であることを自覚し、他会員に不快感を与えるような行動(言動、ゲーム等)を慎み、フェアなスポーツマンとしての自負を持ち、己には厳しく、他人には寛大、かつ責任を重んじ、長幼の秩序を守ることが会員相互の礼儀であると同時に、倶楽部内の雰囲気や常態を楽しくキープしあうことを可能にするファンドであると信じます」(原文のまま)

現在のクラブ運営の基本ともいえる先人の言葉を胸に、今年、私たちは豊かなテニスライフを創造し、「誇らしき倶楽部」を目指す10年ビジョンを作成しました。テニスを楽しむ環境を守り、発展させて次世代へバトンタッチするためには、歴史を守り、伝えていくことも重要なのだと思っています。

福田雅之助氏没後50年 ～継承される庭球の心～ テニスミュージアム委員

藤岡 興平



「この一球は絶対無二の一球なり」

多くのテニス選手に影響を与えたこの言葉は、日本テニス界の父とも言われる福田雅之助氏が記した『庭球規』の一節です。福田氏が亡くなって、今年で50年になります。同氏はデビスカップに出場し、四大大会でも活躍した名選手としてだけでなく、選手としてあるべき姿を説き、日本テニスの発展に貢献した人物としても知られています。

福田氏が遺したメッセージをひもとくと、「テニスを通じてスポーツマンシップを発揮し、人間形成をしてほしい」という願いを感じ取ることができます。こうした福田氏のDNAを後世に伝えることは、日本テニス界が今後も世界で評価されるために不可欠であり、テニスミュージアム委員会の使命の一つです。ここで福田氏の人生と数々の功績を振り返り、支援者の皆様と、今後のテニス界をリードする若い選手にお伝えできればと思います。

本記事は書籍や随筆、同氏を知る方々から伺った内容をもとにまとめました。温かくお読みいただけたら幸いです。

第1回全日本選手権優勝から世界へ

日本でテニスプレーされるようになったのは、神奈川県横浜市に外国人居留者の専用クラブとコートができた1878年以降のことです。当時は硬球（レギュレーションボール）が高価であったため、軟球によるテニスが主流でした。

1897年に現在の新宿区西早稲田に生まれ、同地で育った福田氏はもともと野球少年でした。早稲田中学に進学後、本格的にテニスを始め、大学では軟式テニスの選手として名を馳せました。

日本で硬式テニスが普及したのは1920年頃で、慶應義塾大学庭球部や、早稲田大学庭球部出身の三神八四郎氏らが、軟式から硬式への転換を主張した数年後です。ほぼ同時期の大学卒業後に、福田氏は硬式テニスに力を入れ始めました。1922年に初めて全日本選手権が開催され、男子シングルスには63人が出場するなか、福田氏はシングルスで優勝します。その後、世界的に活躍をしていた熊谷一弥氏、清水善造氏や柏尾誠一郎氏と共に日本代表としてデビスカップ（1923、25年）に出場。パリ五輪、全英・全米・全豪大会など1925年シーズンまで世界で活躍しました。

イースタン・グリップへの挑戦

日本テニス草創期はストロークのグリップにおいてウエスタン（グリップ）が主流だった、と聞いて驚くテニス選手は少ないのではないのでしょうか。

ウエスタンが主流だった背景には、前述のように軟式が先に普及したことがあります。軟式はウエスタンで、フォアハンドもバックハンドも同じ面で打つことが一般的だからです。そのため硬球が使われるようになってからも、ストロークはウエスタンで打つことに日本のテニス選手は何の疑いもありませんでした。熊谷氏や清水氏もウエスタンで戦っていましたし、福田氏もウエスタンで全日本を制し、世界に挑戦しました。

一方、世界のテニスはどんどん進化し、スピードと角度が重視されていきました。こうした中で、1923年にアメリカの世界的選手であったビル・チルデン氏と対戦したことが、福田氏のグリップを変えるきっかけとなりました。

チルデン氏のアメリカン・ツイスト・サービスは、福田氏のバックハンドに高く弾み、そのレシーブをウエスタンでドライブするのは至難の業、と痛感したのです。同時に、世界の選手を見渡すと、みな両面を使ってテニスをしていることに本当に驚いたといいます。こうしたプレースタイルに対応できる合理的なグリップはイースタン・グリップでしたが、このイースタンの創始者とも言われる人物こそチルデン氏でした。

自称理想家の福田氏は、その年のデビスカップ終了後に、欠陥を覚ったウエスタンを捨て、イースタンの採用に取り組みます。優れた技術を日本への土産として持ち帰ることが使命だと信じたからです。習得には想像以上の困難がありましたが、福

田氏の姿を見て、世界ランキング3位まで上り詰めた佐藤次郎氏はじめ、多くの選手がイースタンで活躍するようになっていきました。自分が得た知見を独占するのではなく、他の選手に惜しみなく与え、日本テニス界の発展に貢献したことが、福田氏が日本テニス界の父と呼ばれる所以なのです。

ただ、福田氏が解説する技術書には、イースタンを丁寧に紹介しつつも、「グリップは自分に適したものを採用し、位置・高さ・低さに最も合うように適用すべきである」と記されています。自身の経験・理論を押しつけることなく、選手の主体性を尊重する姿勢には懐の深さを感じます。

指導者としての温かさと厳しさ

福田氏は、1956年～73年に母校である早稲田大学庭球部監督、1959年にはデビスカップの監督を務めています。それ以前も長く、早稲田大学庭球部コーチを担った記録が残っています。福田氏は、部室の縁側やコートサイドでパイプの煙を燻らしながら、言葉少なに練習や試合をじっと見守っていたようです。コート北東側そばにある自宅には頻りに学生を招き入れていたものの、寡黙な性分だったため、同じくテニス選手だった富美子夫人が福田氏の意を汲み取り、優しく学生に語りかけることもあったようです。

試合に負けた選手には「悔しくて勝手に反省するだろう」と何も助言されない一方で、勝った選手には「有頂天になるな」と釘をさすことが多かったといいます。相談には親身に乘るものの、技術面や部活運営で、自分のやり方や考えを押しつけることはなく、学生の自主性に任せる姿勢だったそうです。

ただし、福田氏がコートに現れただけで、学生たちはピリッとした雰囲気になったそうです。練習内容のみならず、コート整備、個々人の生活態度まで目が行き届いており、福田氏に心の底まで見透かされているような気持ちになる学生もいました。

デビスカップ監督時は、宮城淳氏と柴田善久氏を相手に2か月間、徹底した厳しい練習を行ったことが記録されています。20分間の打ち合いではエラーを数え、課題とされたサービスとスマッシュでは毎日100球、累計5000本を打ち込み、サービスの確率は80%、スマッシュは90%を優に超える正確な技術を身につけた、と記されています。

テニス記者としても活躍

福田氏は1927年から東京日日新聞社（現：毎日新聞社）の嘱託社員として、テニスに関する記事を担当していました。それ以前の現役時代にも海外を転戦しながら空き時間を見つけては、世界中のテニス選手や試合内容について新聞社に事細かくレポートしていたことが驚きです。選手の体型、表情、各ショットの特徴、選手が置かれた状況や心の声などまで、読めば試合のダイジェストを頭で映像化できるほど細やかに記述されています。この記事は福田氏の愛称をとって『マアちゃん通信』として連載されました。

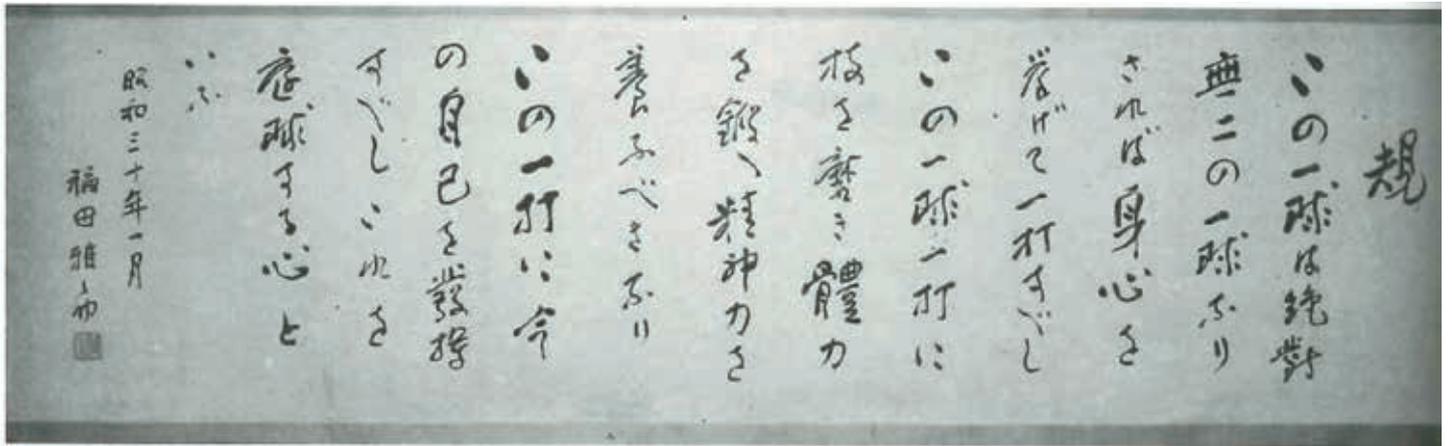
晩年には『図説テニス事典』、『日本テニス協会六十年誌』や『早稲田大学庭球部七十年誌』の編集を手掛けています。後世のテニス界や後輩のために尽力された熱意には敬服します。

スポーツマンシップを定めた『この一球』

テニスに対する溢れる情熱を比喩的に記した随筆を、福田氏は1949年、52歳のときに書いています。

「今のテニスは、私にパイプの味を味あわしてくれるほうが多い。パイプの味・パイプの存在を忘れさせてくれる、いいテニスが見られないのは淋しい。（中略）今のテニスの品質がぐっと落ちた」と厳しく批評していました。福田氏が頭の中で描く理想のテニスと現実が、かけ離れていたことを憂えていたようです。

テニス界の将来を思って福田氏が遺した言葉をまとめた代表作が、『この一球』（ベースボール・マガジン社）です。福田



氏は生前、同社制作の専門誌『テニスマガジン』にコラムを寄せていました。亡くなった後、日記に書かれた「この一球を本にしてほしい」という遺志を富美子夫人が発見し、連載記事の内容を一冊にまとめることになったそうです。

筆者が驚いたのは全200ページの半分を割り、6万字あまりを使って「スポーツマンシップ」について語っていることです。

近年のある調査で、大学生200名のうち「スポーツマンシップ」という言葉は97%が知っているが、説明できるのは僅か1%という発表があります。スポーツマンシップについて統一の見解がないことを示す調査結果かもしれませんが、福田氏の『この一球』にはテニスにおけるスポーツマンシップが規定されています。現代の日本スポーツにおいては、選手宣誓時にスポーツマンシップが用いられるように、それは試合における倫理的・道徳的な側面を指すことが多くなっているように感じます。しかし、福田氏が言うスポーツマンシップは、もっと広義で網羅的です。僭越ながら、要約すると以下のことが述べられています。

「まずは、そのスポーツが好きであることが大切。スポーツはあくまで趣味であり、自分が好きでやっているのが辛いことがたくさん転がっていて無理が生じるのも当然である。その無理を無理と感じないで楽しむことが、これもまたスポーツである。スポーツでは勝とうとして闘志を燃やし、体力や精神力を鍛えジェントルマンを目指すこと。ジェントルマンは自制ができ、正直であり、公明正大である。テニスの根本は、この一球を無心で打つこと。これにはテニスの技術的・精神的な基本を理解していないといけないうし、日頃毎日の積み重ねがないとできるものではない。そしてまた、テニスは代わりがないことに意義がある。勝敗は絶対であるが、ハードファイトである故に、いかにプレーしたかが大事で、スポーツマンらしく負けることがテニスの第一要件である。規制を守り、自分を誠にし、人をあざむかず、相手を尊敬して、真剣にプレーし、フェアプレーに終始することが全てのスポーツマンであり、グッドルーザーに近づく。これら全てが人間形成に集約され、良い人間になれる。人間がよくなくては、真の勝利はない」

上記のことがよく示された福田氏が挙げるスポーツマンシップの劇的シーンを以下に引用します。

「イギリスとオーストラリアのデ杯戦の有名な話、ふたりの偉大なスポーツマン、テニスの驚異的な大家、イギリスのパークと、オーストラリアのブルックスが、重大なマッチを、戦っていたときだった。パークはセット2-1でリードし、3度目のマッチポイントを迎えた。彼は深いドライブで、ブルックスをコートから追い出して、それについてすぐネットへ進んでいった。ブルックスはロブを上げたが、短かった。パークは猛烈にボールを叩いて、ブルックスのコートに決定的ショットを放った。だが彼はラケットを長く振り降して、フォロースルーしたので審判がだれもわからぬほどに、ほんの軽くネットに触れた。『ゲームセット・マッチ・パーク』と、審判はコールした。ブルックスは前進して、笑いながら祝意の手をさし出した。パークはボールを打った場所にとどまりながら、審判に向かって『ミスター・アンパイア、私はネットを打ちました』と言った。ブルックスは祝辞を述べようと、なお黙って立っていた。『ポイントはブルックス君のもの。デュース』とアンパイアはコールした。ブルックスは延ばすことのできない、最後の

チャンスを速やかにつかんだ。試合も待望のデ杯も、遂にオーストラリアのものとなった。パークがスポーツの伝統に従ったことを、テニスマンはだれひとり疑わなかった」

「この一球は絶対無二の一球なり（中略）これを庭球する心といふ」。本稿の冒頭でも触れたこの『庭球規』は、福田氏が1941年、44歳のころに早稲田大学庭球部の部員に贈ったテニスと向き合うための掟や心構えです。

額装された直筆の庭球規は今日も部室に掲げられています。

プロテニス選手の誕生やジャパンオープン初開催から50年、テニス界は変貌を遂げました。ラケットをはじめとするギア、プレースタイル、指導者・施設の増加、科学的トレーニング、戦術と分析、グローバルなツアー大会の確立、プロ選手が海外で戦い抜くための環境構築あるいはメディア普及と商業化などです。何一つ変わらないのは、テニスが育むスポーツマンシップが今日まで絶えず続いており、その發揮において他のスポーツを凌ぐものがあることです。最初の一球から、最後の一球が決まるまで、無心で打ち込む精神が人を育て、人に感動を与えています。



第1回全日本選手権に優勝し、ニューヨークカップを手にする福田氏



早稲田大学庭球場で愛用のパイプを手にする福田雅之助氏

【参考文献】『テニスこの一球』（福田雅之助著、1986年、ベースボール・マガジン社）／『図説テニス事典 ENCYCLOPEDIA OF TENNIS』（福田雅之助ほか、1973年、講談社）／『佐藤次郎』（福田・針重共著、1935年、早稲田大学庭球部、稲門テニス倶楽部）／『日本テニスの源流 福田雅之助物語』（岡田邦子著、2002年、毎日新聞社）／『昭和のテニス侍』（宮城淳著、2022年、日本文化出版）／『パイプ随筆』（青羽芳裕編、2014年、未知谷）／『この一球、この100年』（2004年、早稲田大学庭球部・稲門テニス倶楽部）／『テニス指導教本Ⅰ』『テニス指導教本Ⅱ』（日本テニス協会、2015・23年、大修館書店）／『スポーツマンシップとは何か？』（谷釜尋徳・渡邊瑛人、2020年、スポーツ健康科学紀要17巻）

柏尾誠一郎氏「スポーツマンシップと実生活」

テニスミュージアム委員
共同通信社編集委員
小沢 剛



日本が初めてオリンピックでメダルを獲得したのは、1920年アントワープ大会のテニスだった。シングルスで熊谷一弥が銀、ダブルスでも熊谷・柏尾誠一郎組が銀メダルである。

熊谷さんは、その翌年、清水善造とデ杯決勝まで日本を導いた人なので、テニス関係者なら知らない人はいない。だが、熊谷さんとのペアでメダルを獲得した柏尾さんはデ杯戦ではほとんどプレーしていないこともあり、印象は希薄だ。

しかし、東京2020大会がコロナ禍による開催の1年延期が決まる前、柏尾さんの信頼する部下だった方の関係先から多様な資料がテニスミュージアム委員会に寄贈された。主なものは三井物産時代の戦前のパスポートやフランス政府発行の身分証明書、上海時代の思い出のメモ、記念の写真を貼ったラケットなどだ。

中でも珍しいのは1962年に亡くなる前年に便箋4枚に記した「スポーツマンシップと実生活」と題した直筆の所感である。64年東京オリンピックへと向かう時代に、ルールを守る意味を説いた。現代にも通用する文意であり、概略を記す。

「スポーツマンシップと実生活」

スポーツマンシップとは運動家精神または競技精神とでもいうか卑怯なことはしない、正々堂々とやる 疑わしい点は相手に譲る 物事は一生懸命にやる等 大体何人にも了解されていると思われるが、それは要するに遊戯をやっているだけのことであって、実世界には通用しないエンのないものと思ってみる人々がまだ相当にあるのではなからうかと思うので筆を執ってみた。

一体スポーツマンシップとは何かということを皆よく本当に了解しているであろうか。私の思うところでは各種のスポーツにはそれぞれの規則なり規約なりが定まられている。内外のスポーツみな同様である。そして、それをやる者はそのルールの文字と精神と慣習伝統の許す範囲内においてあらゆる一(?)を行いて相手を打倒するために全力を費やし相手に少しも仮借しないと共に相手から少しのフェバーをも期待しない。このようにして技を争うというのが、あらゆるスポーツの本髄であると思う。もちろん勝敗の結果にこだわってはならない。そのために心の平静を失い見苦しいまねをする事は最も排斥されるべきである。

勝敗にこだわらぬというのと最初からこれを重要視せずに単なる運動をやるといふのは違う。(中略)

運動競技のルールというものは実社会でいうとそれは法律であり慣習であり、また人の道とも言えるであろう。法律やその精神をよく理解し、また人の道を知らずして正しい生活はできない。

運動競技では厳しくルールを守ることを要求されていると同様、社会では法律、人道が要求されている。吾々は社会において法律を知り人の道を知り始めて正しい道を行ける。そしてそこには相手を尊重する民主主義も得られる。

そしてこの範囲において吾々は健全な競争によって社会の進歩を達し得る。競争なくして進歩はない。もちろんスポーツの仲間にはルールを十分に知らぬ者は少ないと言えるが、実社会には単なる運動だけでよいと言う人もあろう。それならそれも自由である。しかしそれは運動競技そのものの本質ではないと私は信ずる。(中略)

オリンピックで実力を十分発揮できなかったと言うのは自分の技術の未熟か精神力の不足にほかならない。練習の時に時々



柏尾氏のパスポート、フランス政府発行身分証明書と「スポーツマンシップと実生活」の直筆原稿

できるような事が、いつも自分ができると思っでは間違いであろう。

吾々はスポーツマンシップを実社会から離れたもの等とは思わずに社会の秩序、法律、人道をはっきり頭に入れ、他人にあらゆる機会と自由を与え、しかもルール破りの害を受けぬように慎重に行くことこそ吾々の道であると信ずる。

まず我々が相手にあらゆる機会と自由を与えて、これを競争していきたいものと思う。



パスポートには社業で欧州各地を飛び回ったことが分かる各国の出入国スタンプが押されている。そういえば、1920年アントワープ大会は、日本が参加した2度目の五輪で、日本政府は「まだスポーツが国民全般の支持を受けるに至っていない」(日本体協75年史)ことを理由に派遣費用を負担しなかった。このため派遣母体となった大日本体育協会(現日本スポーツ協会)は三井、三菱の大財閥に援助を要請、双方で旅費の半分、3万円ほどを用立てたという。今なら1億を越す額だろう。

柏尾は三井物産、熊谷は三菱合資会社銀行部(現三菱UFJ銀行)に勤務した。当時の日本スポーツ界は人的、物質的に財閥に支えられていたことが分かる。



柏尾氏(右)が映った写真(1935年撮影)をはめ込んだラケット

『清水善造さんを朝ドラにする会』について

テニスミュージアム委員
北里大学講師
板橋 C.マリオ



清水善造…群馬県西群馬郡其輪村出身の男子テニス選手。1920年、日本選手としてウィンブルドン初出場でオールカマー制決勝進出(現在の準決勝)。1921年、テニスカップでチャレンジャウンド決勝に進出

ニューズレター12号では、群馬県高崎市にできた清水善造メモリアルテニスコートの紹介をさせていただきました。今回は、その中で少しだけ触れた『清水善造さんを朝ドラにする会』について、会長の高木香保さんにお話をうかがってきました。

発足のきっかけについて

そもそも、私が「清水善造さんを（NHKの）朝ドラにしたい」と思ったきっかけは、清水善造さんのことを全く知らなかった私が、清水善造メモリアルテニスコートで『カフェゼンぶうまいぞう』を経営することになり、ある方に勧められて読んだ『やわらかなボール』のチルデン選手との伝説のシーンで雷に打たれたような衝撃を受け、滝の様に涙を流し、「こんなにすごい人が群馬にいたんだ…もっとたくさんの人に清水善造さんを知ってほしい！」と感動したことです。そして、そのためには朝ドラにするのが早いのではないかと思います。



『清水善造さんを朝ドラにする会』前列左が高木会長で後列右端が清水善造さん

ぜなら、私の前職の大同生命の創設者である広岡朝子が朝ドラの『あさが来た』で大ブレイクし、一気に有名になったのを体験していたからです。

この思いを地元紙の上毛新聞に投稿したところ、それを読んだ見ず知らずの94歳の女性が感銘を受けたと再度、上毛新聞に投稿して下さって「なんとかこの方がご存命のうちに朝ドラにしたい！」との思いから、会の発足を宣言したわけです。これが2021年の奇しくも善造さんの命日、4月12日でした。

これまで、そして今後の活動について

その後、奇跡の連続で善造さんの孫である清水善三さんとなることができ、同年10月29日に愛媛から善三さんをお招きして、テニスクリニックと講演会、キックオフミーティングを行いました。その後、会のグループLINEを作成し、現在44名が参加しています。主なメンバーには、清水善造さんの出身校である群馬県立高崎高校や一橋大学の軟式・硬式テニス関係者、また3名の高崎市議会議員がいます。

当初、朝ドラにするためにはどのような道筋があるのか分からなかったのですが、他の自治体の成功例などを取材し、署名活動と自治体の支援が必要だということが分かりました。しかしながら、膨大な署名を集めて管理することは、個人ではできません。そこで、各種団体と協力して、このムーブメントを高崎から群馬、そして全国へと広げていきたいと考えています。その際には、全国のテニス関係の皆様にもご協力をお願いいたします。

書籍紹介

『清水善造伝』

日本の大学テニス部で2番目の歴史を誇る一橋大庭球部、OB・OG会「一橋庭球倶楽部」が創部130年の記念事業として、OBである清水善造氏の伝記『清水善造伝』を今年、上梓した(236ページ)。

日本テニス黎明期の大選手の足跡や人柄などを、お孫さんの清水善三さん所有の遺品、記録、カップ類、出身地の高崎市資料などに基づき、また関係者の思い出を集め、まとめたものだ。

発刊の辞で岡田哲朗一橋庭球倶楽部会長が「清水先輩に関する文献は数多くありますが、それぞれの記述内容に相違点が少なからずあります。本誌は、これらの文献を超えて新たな伝記を築き上げようとするものではなく、また事実を特定することを目的とはしていません。清水先輩に関する資料をできるだけ多く、かつ多角的に提示することにより、その判断は読者の皆さんに委ねることにしたいと思います。

そのことが、自らの自伝を残さず『教科書のやわらかなボールは事実か?』との問いに対し、シミースマイルで明確にお答えにならない清水先輩の意に沿うことになるのではないかと考えるからです」と記したように、美談として語り継がれる「やわらかなボール」にも1項目を立てて考察している。

年表はじめ写真、資料が抱負で、興味深い一冊となっている。電子書籍の形態もある。



関心のある方はメールにてお問い合わせください。
アドレス: zenzodenhtc@gmail.com

令和5年度『特定寄附金テニスミュージアム』会計報告

令和5年4月1日～令和6年3月31日

前期末残高(令和5年3月31日)	45,906,987円
令和5年度寄附金額	1,507,500円
令和5年度委員会活動費	10,628,002円
令和5年度末基金残高	36,786,485円

令和5年度テニスミュージアム委員会活動報告

■主な活動

新WEBデータベースへの史資料データ移行/史資料寄贈受け入れ
所蔵する史資料への問い合わせ・貸出対応/常設ミュージアム実施業務
ニューズレターの制作・発行/委員会のリモート会議の開催など

■テニスミュージアム委員会

委員長: 吉井 栄 副委員長: 中川智文
常任委員: 武内 勝、後藤光将、小林やよい、越智和夫、清水伸一
委員: 我孫子和夫、小沢 剛、塚越 亘、渡邊康二、金森 悟、福池 泉、板橋 C.マリオ、藤岡興平